「古代学の評論誌（ジャーナル）」編集者
大和岩雄氏と安本美典氏

新井　宏

◆古代学のジャーナリズム

ジャーナリズムと言えば、報道、解説、批判の三要素を持つことが要件である。しかし、日本においては、芸能、医療、宗教分野の他に、学問分野でも、あまり機能していない。

その中でも特に、国民的な関心の高い「古代学」の分野では、報道、解説はともかくとして、批判の機能が著しく乏しい。

二〇〇〇年十一月、東北文化研究所の藤村新一による「旧石器捏造事件」が毎日新聞北海道支局の一大スクープとして報道された。

藤村新一は一九八一年宮城県岩出山町の座散乱木遺跡で四万年前から日本にも中期旧石器時代があったことを発見してから、毎年のように十万年単位で旧石器時代の開始時期を繰り上げ続け、ついに北海道十津川町の総進不動坂遺跡で七十万年前の石器を発見したとして世界の人類史の通説を覆した。しかしそれらが全て捏造であったことが間もなく暴露される。

とにかく神がかっていた。関係者がおかしいと思わなかったのであろうか。いや一部の専門家ばかりでなく、実はだれもがおかしいと思っていたのである。しかし、学界の長老の「お墨付き」を得て、それをマスコミが後押ししていた。特に新聞社の本社部門は、取材源からの「面白い情報」が絶たれることを怖れ動けなかった。唯一、中央から離れた毎日新聞の北海道支局だけが「おかしい」ことを藤村新一の捏造現場を撮影して報道したのである。

このような事例は極端ではあるが、古代学関係では類例がしばしば起きていた。定説に逆らって論文を書いて

も、新説を排除する組織は強力であり、査読を通過することは非常に困難である。すなわち、古代史関係では、ジャーナリズムが全く機能していなかったのである。

そのなかで、古代学のジャーナル編集者と見做せるのは、『東アジアの古代文化』を主催した大和岩雄氏と『邪馬台国』の編集人を務めた安本美典氏くらいであろうか。

筆者は永年『東アジア』や『邪馬台国』の読者であると共に、主要な投稿者のひとりであった。今回は何かとお世話になった大和岩雄氏と安本美典氏のことを紹介してみたい。

◆『東アジアの古代文化』と大和岩雄氏

筆者が韓国国立慶尚大学の招聘教授を始めたのが二〇〇一年、最初の三年間は韓国に住み、月に一週間ほど日本に戻る方式であったが、二〇〇四年からは本拠地を日本にもどし、逆に月に一週間ほど集中講義をする方式に切り替えた。そして、日本の主要学会誌に集中的に論文を発表し始めた。

ほぼ四年間(2004～2007年)に執筆した論文を数えてみると、『考古学雑誌』2件(52頁)、『鉄と鋼』2件(15頁)、『朝鮮学報』1件(38頁)、『情報考古学』1件(14頁)、『計量史研究』3件(23頁)、『東アジアの古代文化』3件(77頁)、『邪馬台国』1件(12頁)、その他2件(12頁)で、合計15件(243頁)となっている。

これらの発表雑誌の中で、『東アジアの古代文化』と『邪馬台国』は学会誌ではない。何にでも新しい着想を主張したい筆者の性向から、学会誌に掲載した論文にも、定説を批判して新説を提示するものが多かったが、それでも査読の壁は意識して執筆していた。

その点では、大和書房の『東アジアの古代文化』に載せた「炭素十四による弥生時代遡上論」一二七号(27頁)及び「同(再論)」一三五号(20頁)と『鉛同位体比から見て三角縁神獣鏡は非魏鏡』一二九号(30頁)は学界の主流の見解にたいして正面から批判した論文である。

筆者は大学時代に原子核物理を専攻しており、放射線物理学のいわば専門家であった。炭素十四も鉛同位体も放射性物質である。だから異分野から論争に参加したということができるが、炭素十四年代問題も鉛同位体比問題も議論の核心は放射線物理学なのである。

いわば異分野からの投稿となると、門前払いとなるか、査読に長期間かかることが想定され、個人的な消耗が強いられる怖れがあった。それに対して『東アジアの古代文化』は総計80頁にもなる三論文をほぼ即時掲載してくれたので本当に助かった。

その当時、国立歴史民俗博物館(歴博)が主導する炭素十四分析(AMS法)による弥生時代五百年遡上論については、考古学界で喧々諤々、混乱が続いていた。たとえば、大貫静夫氏が一般考古学者の見解をまとめたところ

によると、弥生時代の遡上は評価しつつも「弥生時代開始期が前十世紀までさかのぼるとは考えられず、前期末中期が前三〇〇年を大きく越えて、前四〇〇年に近づくことも考えられない」と総括して歴博の遡上論に歯止めをかけていた。

それに対して筆者が論文で指摘した内容は、歴博の暴走を止めるために大きな役割をはたすことが期待できた。

すなわち、歴博は「炭素十四の大気中の濃度は場所によって変わらない」との前提で年代を算定しているが、理論的にはそんなことはあり得ない。炭素十四が生まれるのは大気高層でしかも北極面や南極面に多く、赤道面では少ない。その炭素十四は最終的には、深海に吸収され蓄えられて消滅する。そうであれば、炭素十四の濃度は、大気高層圏に多く、海洋よりも内陸に、極地よりも赤道面に多く、海洋の影響を受ける島国では少なくなるはずである。炭素十四濃度が高いということはその部分で炭素十四年が新しいということである。

それを歴博では、「大気における対流圏での混合は早く、地域間の大気中の炭素十四濃度の違いは、年平均レベルでは非常に小さい」として無視している。もし歴博の主張が正しいならば大都市の大気汚染など無くなるはずである。例えば東京で大火災が発生して炭酸ガス濃度が急上昇しても、鎮火してしまえば「炭酸ガス濃度は数日後には元に戻り、年平均レベルでは非常に小さい」と言っているようなものである。しかし炭素十四の発生は毎日毎日永続的に続いている。

地域間に炭素十四濃度に差が無いというが、実績を調べてみれば、海洋の多い南半球では北半球に比して炭素十四年が平均五十七年も古くでている。標高が千メートルあがると炭素十四年が百年ほど新しくなるデータもある。そもそも海洋国の日本樹木の炭素十四年代は国際標準に比して平均五十年ほど古い可能性が高い。

時代的にみても古代エジプトやイスラエルの考古学で成立している精緻な年代に対して炭素十四年代が数百年も古くでて混乱している。中国でも炭素十四年の測定精度に問題があるにしても殷夏時代が百～二百年古くでている。

その他にも分析試料の土器付着炭化物は地中の油分を吸着しやすく、分析に際してその油分を取り除く必要があるが、除去程度によって炭素年代が異なるが、その学術的な確認がなされていない。だから炭素十四年代が百年以上も古くでる試料が続出するのである。

このような問題点の総合的な指摘は筆者の論文が「最初」であった。

大和書房の社長であり『東アジアの古代文化』の責任編集者である大和岩雄氏は、筆者の論文を評価してくれて面談した折に筆者の一連の論文を著書として出版することを提案してくれた。歴史分野で定評のある大和書房

からの出版はまったく渡りに舟、願ったり叶ったりであった。大急ぎで原稿を準備し、半年後の二〇〇七年八月には『理系の視点からみた考古学の論争点』を初版三千部で出版した。社長直々の企画であり、全ての面で配慮された結果だと思っている。

また出版後、朝日新聞の書評欄に井上章一氏が好意的な紹介をしてくれたこともあって、翌年三月には早くも第二版が出版された。

◆『理系の視点からみた考古学の論争点』

著書『理系の視点』は本質的には、論文集である。しかし、厳密さばかりを追いかけていると専門家にしか理解されない難点がある。論文集でありながら新聞雑誌の記事のように読んで貰いたい。そのため、文章も構成も型破りの構成とした。著書の内容紹介を兼ねて、プロローグの一部を抜萃する。

「論争」は人々を惹きつける。特に、争点がきわめて明快であって、百家争鳴の状態にあるテーマほど面白い。政治論争でさえ、郵政問題を「抵抗勢力か否か」と単純化してせまれば国民は反応する。ましてやロマン溢れる考古学や古代史の論争は、時には関連ニュースが新聞のトップ飾ったとしても不思議はない。

「邪馬台国はどこにあったか」。このテーマひとつだけでも、数多くのアマチュアが人生を楽しませてもらっている。専門学者の多くが「大和説」なのに、アマチュア側では「九州説」が優勢で、国民投票をすれば「九州説」が勝つかも知れない。

関連して「三角縁神獣鏡は魏鏡か国産鏡か」も面白い。最近では、魏鏡説が多い専門家の中にあっても、「中国からは一枚もでない」という重い事実から国産説を唱える学者も増えている。その議論の帰趨によっては「邪馬台国論争」にも大きな影響を与えるが、ここでもプロ対アマの構図が見てとれる。

「弥生時代は五百年遡るのか」というテーマも興味尽きない。炭素十四法や年輪年代法など科学的な手法が描く世界は、はたして旧来学説を葬り去ることができるだろうか。考古学の定説とはそんなひ弱なものだったのか。

また、「古墳はどんなものさしで造られたか」という尺度問題も「ひとつの古墳にひとつの尺度」と揶揄されるほど百家争鳴の論争テーマであった。そもそも、わが国の古代史分野では「法隆寺は再建か非再建か」の論争が最もエキサイティングであった。その際の主要な論点として、法隆寺が高麗尺で作られたという尺度論争があったので、その伝統を引き継いだのかも知れない。

その他にも、金属考古学の世界では、「弥生時代には製鉄が本当に行われなかったのか」とか「古代日本に間接製鉄法があったか」あるいははたして「古代日本では硫化銅の製錬が行なわれたか」などの論争が繰り広げら

れている。

考古学や古代史の世界では、論争の種は尽きることがない。

◆大和岩雄氏と大和書房の歴史

ところで大和岩雄氏および氏が経営する大和書房とはどんな出版社であろうか。

大和岩雄氏は私宅の一室を事務所にして一九六一年に創業したが、学歴もなければ人脈もなく原稿料も払えない状態で、働く若者達の悩みや苦しみを投稿してもらい雑誌にすることから始めたという。

一九六三年の夏のこと、中央大三年の学生がおおきなバックを抱え「読んでほしい」とやってきた。つまっていたのは、交際していた彼女の日記と二人の間で交わされた四百余通の手紙であった。彼女は同志社大の学生だったが、軟骨肉腫という難病のため二十一歳で世を去った。彼女の人生を世に残すために出版できないかとの相談であった。

事務室は夜になると家族の寝室になる。となりの部屋に手紙を拡げて大和氏は読み始めた。なみだが止まらなかったと言う。なんの手も加えず本にしようと決めた。『愛と死をみつめて』はこうして誕生した。初版一万部。たちまちベストセラーになった。年明けの一月にラジオドラマ、四月には大空真弓と山本学でテレビドラマになった。九月には吉永小百合と浜田光夫コンビの映画が封切られ、締めくくりにレコード大賞も獲得。東京五輪のこの年、本は百三十万部も売れた。かくして出版社の基礎が定まった。

おそらく小さな出版社にとって初版一万部は冒険だったであろう。筆者の著書『理系の視点から』を初版三千部で出版してくれたのも、このような経験から来た氏の慧眼だったと感謝している。

大和岩雄氏は、大和書房が順調に回転しはじめると、古代史研究に没頭する。そして十年後の一九七四年に季刊『東アジアの古代文化』を創刊した。

もともとは明治大学助教授の鈴木武樹氏や作家の金達寿氏、古代史の李進熙氏らが作った「東アジアの古代文化を考える会」が江上波夫氏を会長に招請し鈴木武樹氏が責任編集兼発行人となって出発した雑誌である。当初の執筆者を見ると、図書館の古代史コーナーで見かける名前が多かったが、純粋な研究者というより、古代史に関心を寄せている著名人の感じである。

ところが、このような会にありがちな内紛のため、第五号(1975年6月)からは大和岩雄氏が責任編集も引き受ける。

以後、特定の学会や団体との関係を持たない商業誌として発行が続けられ、二〇〇八年に大和岩雄氏が高齢化のため入院し一三七号をもって終刊となった。拙書『理

系の視点からみた考古学の問題点』が出版された半年後である。

大和氏の広汎な研究については、著書の一部を次に掲げて紹介する。

『日本古代試論』1974年、『古事記偽書説の周辺』1979年、『天武天皇出生の謎』1987年、『古事記偽書説はなりたたないか』1988年、『邪馬台国は二カ所あった』1990年、『卑弥呼と邪馬台国』黒岩重吾共著1992年、『秦氏の研究』1993年、『箸墓は卑弥呼の墓か』2004年、『邪馬台国の時代』黒岩重吾共著1997年。『古事記成立の謎を探る』2013年などである。

『古事記偽書説』に関係する著書が三冊もある。実は、そればかりではない。『東アジアの古代文化』に一二三号(2005年春)から一三五号(2008年春)まで十四号(376頁)にわたり『古事記偽書説をめぐって』を連載するのである。一三五号は実質的に『東アジアの古代文化』の終刊号であり、筆者の論考『炭素年による弥生時代遡上論の問題点(再論)』も、大和岩雄氏の最終稿の次に掲載されている。実に生涯にわたり延々と『古事記偽書説』の研究を続け、『東アジアの古代文化』終刊と共に終わるのである。人となりはこの事だけでもわかるであろう。筆者にとっては大和書房と大和岩雄氏に素晴らしい縁をえたが、次の出版社を探さねばならなくなった。そして『季刊邪馬台国』の常連執筆者になるのであるが、この件は後述する。

それからもう一つ、筆者は多分野にわたって数多くの論文を書いているが、自己評価で最も高くランクしている論文に『古事記崩年分注の史料性検証』がある。いわば『古事記偽書説』とも密接に関連する論文であるが、二〇一六年に発表したもので、大和岩雄氏にご覧戴く機会を失った。

◆筆者の『古事記』研究論文

『古事記』は『日本書紀』とは異なり紀年には全く無関心な書で、天皇崩年について僅か十五件載せているだけである。しかも『記』の崩年は『紀』と全て異なる。

それは『記』の崩年が独自の伝承をもつ一次史料だからであろうか、あるいは『紀』では国内史料を『宋書』や『原三国史記』と照合して修正しているからであろうか。結論から言うといずれでもない。

筆者の論文で指摘したことは次の点である。

① 『記』の崩年は干支暦法に不慣れな著者が『紀』の他の天皇の崩年を転用した可能性がある。

② 『記』に崩年が記載されている場合は、必ず『紀』と外国史書『宋書』『三国史記』等の間に対応する記述があるが、記載されていない場合は全く相応記述を見出せない。

③ 『紀』と外国史書の間に対応がある場合は、『紀』

の崩年から一定の方式で『記』の崩年を計算できる。筆者の試案を次に示す。

	『紀』		『記』（修正）		差
天皇					
崇神	前三十年	（二五六年）	二五八年	△	二年
成務	一九〇年	（三五三年）	三五五年	△	二年
仲哀	一九九年	（三六二年）	三六二年	○	年
応神	三一〇年	（三九四年）	三九四年	○	年
仁徳	三九九年	（四二七年）	四二七年	○	年
履中	四〇五年	（四三三年）	四三二年	▲	一年
反正	四一〇年	（四三八年）	四三七年	▲	一年
允恭	四五三年	（四五七年）	四五四年	▲	三年
雄略	四七九年	（四八九年）	四八九年	○	年

すなわち、『紀』と『宋書』『三国史記』等の外国史書さえ手元にあれば、律令期の史人なら『紀』の崩年から『記』の崩年を計算する事が出来たことを意味する。

このことは、『記』の分注として示された崩年は『記』の一次史料ではなく、『紀』の完成した七二〇年以降に追記されたことを意味している。さらに言えば、『記』さえも『紀』の完成以降に成立した偽書であることも否定しえない。

以上のような内容を持つ筆者の論文『古事記崩年分注の史料性検証』を大和岩雄氏に紹介して、『記』偽書説論争に一石を投じかったことをここに示して置きたい。

◆『季刊邪馬台国』と安本美典氏

『東アジアの古代文化』の常連投稿者となったとたんに廃刊になってしまった。代わりをさがさねばならない。そこで考えたのは『季刊邪馬台国』を利用することである。実は『東アジアの古代文化』に投稿する以前に『季刊邪馬台国』にも既に三件の論文が掲載されていた。その内の二件は『季刊邪馬台国』からの依頼により『考古学雑誌』と『情報考古学』に載せた論文の転載であるが、『季刊邪馬台国』87号(2005.4)に載せた論文は、多少事情が異なる。

二〇〇四年の五月十五日、日本のマスコミは泉屋博古館の論文を基に、大々的に「卑弥呼の鏡、中国鏡と成分が一致」と三角縁神獣鏡が魏鏡であることを報道した。しかし、韓国にいて気づかなかったが、遅れて『季刊邪馬台国』85号で知った。考古学界では大騒ぎをしているという。

早速泉屋博古館の原論文を取り寄せて、一読して驚いた。すくなくとも、金属考古学を知る者にとって、とても容認しがたい議論が展開されていた。

そもそも微量成分のアンチモンが錫原料からもたらされたという前提条件そのものが完全に間違っている。アンチモンは銅原料からもたらされるのである。

その上、日本の研究史を全く参照していない。一言で

言えば全く無意味な論文なのである。そのことを早急に知らせなければならない。そしてそのことを12頁の論文にまとめた。さて、どの学会誌投稿するか。しかし学会誌は査読等の手続きで時間がかかる。そこで『季刊考古学』の責任編集者安本美典氏に連絡をとった。

さすがに早い。二〇〇五年四月号にはトップ記事として載り、それを読んだ読売新聞が三月二十五日に千二百字ほどの記事として報道した。これで「一巻の終わり」で、泉屋博古館に追随する者はいなくなった。

その後、一〇〇号(二〇〇八年秋)から一一一号(二〇一一年秋)までの間に十篇の論考を『季刊邪馬台国』に載せ、あたかも常任執筆者のような存在となった。筆者が毎号論考を載せるようになる前は、国会図書館では『季刊邪馬台国』の掲載論文の抄録を作成していなかった。いわば学会誌並みの取扱にはなっていなかった。一〇〇号以降、国会図書館に論文要旨抄録が載るようになったのは筆者が手続きをしたからである。

安本美典氏は一九三四年生まれ、京都大学大学院文学研究科修了。国家公務員上級心理職にトップで合格し、旧労働省入省。退官後産農大教授。

日本古代史の分野では、古代天皇の在位年数が時代を遡るにつれて短くなることから「高天原は邪馬台国で天照大神は卑弥呼」とし「大和への東遷説」(新書版数冊、一九七〇年頃)を唱えて有名になった。その後、百冊近くの著書で「邪馬台国九州説」を唱え、最近では「邪馬台国=朝倉説」を主張している。永年「邪馬台国の会」主宰、『季刊邪馬台国』責任編集者であったが、一二五号頃から編集には出版社の梓書院が表にでてきて、「邪馬台国九州説」に偏っていた内容を「古代史の総合雑誌」へ移行していて、それ以降の筆者の投稿は二件に留まっている。

◆古代史愛好家団体での講演

古代史はアマチュア愛好家の世界である。そのため古代史研究愛好者団体が数多く存在する。筆者はそれらの多くの団体で実に数多くの講演を実施してきた。

そのなかでも大和書房の『東アジアの古代文化』のルーツである「東アジアの古代文化を考える会」と『季刊邪馬台国』の責任編集者の安本美典氏が主催する「邪馬台国の会」からはよく声をかけてもらった。数えてみると「東アジアの古代文化を考える会」で五回、その下部組織である「考古学を科学する会」で二十回、「邪馬台国の会」で三回の講演実績がある。ひとりで3回も「邪馬台国の会」で講演しているのは筆者のみである。

その他、古田武彦氏の史論を信奉する「古田史学の会」でも二回講演をした。

池上曽根弥生学習館が主催したシンポジュウム「東アジアの鏡文化」は超満員の会場で、考古学界の名士、弥

生文化博物館館長金関恕氏の司会のもと、大阪大学大学院教授福永伸哉氏、奈良県立橿原考古学研究所長菅谷文則氏、銅鏡研究の第一人者で大手前大学準教授の森下章司氏と錚々たるメンバーにまじって筆者も基調講演と討論に参加した。その模様は、後に学生社から『卑弥呼の鏡は海を越えたか』という副題をつけて出版されたが、どうも筆者はアマチュア研究者としてよりも韓国国立慶尚大学招聘教授として呼ばれたようである。

また愛媛大学で行われた瀬戸内海考古学研究会のシンポジュウム「考古学における新年代論の諸問題」には瀬戸内海を渡って広島大学や岡山大学等からの研究者が多く聴講に見えていた。

ついでながら、筆者には「講演趣味」があり、考古学関係にかぎらず、市民教養講座とかロータリークラブとかで数多く講演をしてきたが、八十歳になったのを期に体調等で急に不参となることを怖れ、公的な性格のある講演会は全てお断りしている。

◆第二回安本美典賞受賞

邪馬台国の会(会長内野勝弘氏)では、過去に発表された邪馬台国および、古代史全般に関する論文や著作において、優れた業績を残した研究者を称え、「安本美典賞」を贈呈することにした。

昨年は第一回として関川尚功氏が受賞、十月十六日に表彰式と表彰記念特別講演が行われた。関川氏は一九七一年から奈良県立橿原考古学研究所の所員として奈良県桜井市の纒向遺跡の調査に携わり石野博信氏とともに報告書『纒向』を表し、その後も纒向の調査研究に多く従事している。

関西考古学界にあっては箸墓古墳を含む纒向を邪馬台国候補に推すのが主流であるが、その纒向の調査の専門家の立場から「邪馬台国の存在を大和地方に認めることは出来ない」と異色な主張をしていた。

今年は第二回として筆者が選ばれた。筆者は未だ邪馬台国九州説にも大和説に組みした事はないが、鉛同位体比や炭素十四年代等の理化学的手法を用いた分野の諸論考を発表して、邪馬台国九州論者に引用されることが多い。

そのため最初は邪馬台国九州論者と誤解される怖れがあるので辞退していたが、関川氏同様、純粋に研究面での業績として表彰されるならとお受けした。

十一月二十六日(すなわち『まんじ』合評会の翌日)、JR大井町駅東口の文化コミュニティ施設「きゅりあん」で、表彰式と受賞記念特別講演「鉛同位体比から見た弥生期の実年代」が行われる。

コロナ禍などで久しく講演の機会が無かったので先月中程から準備を始めた。一時間半の講演だと言うのに、パワーポイントのスライドが百六十枚にもなってしまう。

おそらく人生最後の講演会になるかと思うと「宿題」にケリを付けたくなった。

そうこうしている内に、素晴らしいアイディアが生まれた。

古墳時代の初期、三角縁神獣鏡の時代は前漢から後漢そして魏などの三国時代に替わった頃で、中国の銅生産が年二千トンを越えていたのがいきなり十分の一程度まで減少してしまった。前漢が周辺国に規格材化した青銅器材料を「供給」していたのが突然止まる。

歴史は経済を観ると実に良く判る。

そのため朝鮮半島でも日本でも自国産の鉛の使用が一斉に始まった。もっとも青銅器の生産に用いる鉛は金属鉛(Pb)である必要はない。鉱山の地表に露出した方鉛砿(PbS)を拾って熔融青銅に添加するだけで融点を下げ鋳造性を向上できる。

三角縁神獣鏡の時代、青銅器生産は発掘量から推定して年一トンも満たなかったと思う。方鉛鉱で言えば百キロにも満たない。日本の対馬の対州鉱山や岐阜の神岡鉱山の露頭の方鉛鉱が使用された実積が次々に見つかる。もしかしたら良質のマラカイト(孔雀石・炭酸銅・緑色の結晶)を露頭で見つけだして銅の生産を始めていたかも知れない。何しろマラカイトと炭を混ぜて加熱するだけで銅が取れるほど良質な銅鉱石である。久しぶりに十数年前の熱気が蘇る。

記念講演でその詳細を述べたいが、とても時間不足である。何らかの書き物にして報告することになれば幸せである。

擱筆　二〇二三年十一月二十五日

『まんじ』百七十号記念合評パーティーを前に